

SIA-1

義肢装具学科の技術を生かした学生ボランティアの可能性

国立障害者リハビリテーションセンター学院 義肢装具学科

○小島 日向子、今野 未羽、石田 一輝、神力 姫衣、松下 亜実、徳井 亜加根

【背景】新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い大きな問題となったのが、サージカルマスクやガウンといった個人防護具（以下、PPE）の不足である。当学院の義肢装具学科生は日常的にプラスチックや繊維材料を扱っており、3D-CADや3Dプリンタを扱うデジタルファブリケーション技術を習得している。そこで、ものづくりボランティアとしてPPEの供給に貢献できると考えた。

【活動】指導教官の下、有志部員5名で4月9日から材料の入手、試作を行い、自宅作業となるため分業工程の確認を行った。4月13日から5月31日までの期間に約200枚の布マスクと約1600個のフェイスシールドを製作し、所沢市のほか、33の医療機関・介護福祉施設、4医師会（歯科医師会含む）に配布した。

【考察】本活動を学生が実施できたのは、教官所有のミシンや3Dプリンタ等の機械を学生の自宅に持ち帰ることができたこと、指導教官ほか医師等専門職の助言を受けられたことなどが挙げられる。本フェイスシールドを配布した小田原医師会に登録する37施設に対して実施したアンケート調査では、全ての施設が義肢装具学科生のものづくりボランティアに対し「依頼したい」、「ものによっては依頼したい」と回答し、学生ボランティアへの期待を伺わせた。

【まとめ】PPEに限らず、災害等非常時は多くの物品不足が懸念される。全国の義肢装具学科生が社会貢献できる可能性は高く、今後、各校の学生が連携するシステムを構築することも視野に入れて活動したい。